



TITLE:

# 井田制と其社會的意義

AUTHOR(S):

財部, 靜治

---

CITATION:

財部, 靜治. 井田制と其社會的意義. 經濟論叢 1937, 45(2): 163-177

ISSUE DATE:

1937-08-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130990>

RIGHT:

# 京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 二 號      第 四 十 五 卷

昭和二十二年八月一日發行

## 論 叢

營業稅の課稅標準と賣上稅の課稅方法

法學博士 神戸正雄

井田制と其社會的意義

法學博士 財部靜治

國民共同體の人間學的基礎

經濟學博士 石川興二

## 時 論

輸入統制としての『Aski』制度

經濟學博士 谷口吉彦

## 研 究

純損益概念するに關する若干の基本問題について

經濟學士 熊本吉郎

工業經營規模の双峯分布について

經濟學士 田 杉 競

職業の意義と問題

經濟學士 澤崎堅造

資本移動の近代理論

經濟學士 松 井 清

## 說 苑

カレッキの數學的動態理論

經濟學士 青山秀夫

複式簿記法の發生

經濟學士 岡本愛次

## 附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

（禁 轉 載）

# 井田制と其社會的意義

財 部 靜 治

## 一

事<sub>ニ</sub>魏文侯<sub>一</sub>、作<sub>テ</sub>盡<sub>ニ</sub>地力<sub>一</sub>之教<sub>ト</sub>、又創<sub>ニ</sub>平糶法<sub>一</sub>、行<sub>ニ</sub>之魏國<sub>一</sub>、國以富強とは、支那戰國時代に當り時の法家者流「Legalists」に屬せし李悝に就き辭源の記する所なり、當時海内擾亂、諸侯力爭、雖<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>至道<sub>一</sub>、人不<sub>レ</sub>暇<sub>レ</sub>學、雖<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>善教<sub>一</sub>、上無<sub>ニ</sub>庸行<sub>一</sub>とせられし際、少<sub>ヨリ</sub>也<sub>ニ</sub>千濟民<sub>一</sub>、嘗從<sub>ニ</sub>周人<sub>一</sub>、受<sub>ニ</sub>後稷公劉之遺教<sub>一</sub>。（太宰春臺著「產語」有土第三參照）依りてその君のため地をして遺利なからしめんとして説ける所なり、要は率<sub>ニ</sub>其土性<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>害<sub>レ</sub>所生、不<sub>レ</sub>彊<sub>レ</sub>所無（參看同上）の謂なり、天地生々の自然に循ひつつ人力を盡さんとするに外ならず。然るに之に似たる用語にして全く相反せる意義を示すため地力耗盡 Exhaustion of Soilを防ぐとは、泰西にて近代に至り農學界の警語として發せられし所なり、そは永存の地力を漸次滅失し去るが如き仕方に耕作を重ねるの謂なり、第二十世紀に入りてより旬年餘經過の後物故せし獨逸經濟學者 J. Conrad が同國農藝化學の大家にして人造肥料の開物により世界の農學及實務の指導者となりし Liebig の地力耗盡觀に就き一論文 Liebig's Ansicht von Bodenerschöpfung, 1864 を草し、爾來祖國の内外に幾多出藍の經濟學者を育成するの土臺を築き初めてよりも、未だ百年を経歷するに至らず、夫れ然り一有半世紀來に於ける歐米農學の發達を驚嘆すべくんば、右一勸農策に反映さるる二千有餘年前の

支那農業開化も亦嘆賞すべく、彼此商較の目的上更めて考察するの値なしとせしや。現代北米合衆國に於て支那史の研究上殆んど獨歩の觀を呈する Kenneth Scott Latourette が古往の支那本部を觀し、稍過褒の嫌ひなしとせざるも尙能く大綱を捕捉し、その疆域は自然にして一大文明の家郷たるに至適す、包擁せる土壤の肥沃言語に絶し、その最良部分は四千年を通じ四季殆んど絶え間なき農作施され、一部は耕作者の熟練により一部は土地自體に備はれる本原力の賜として今尙何等地力耗盡の兆を呈せずと迄讚稱せるに於ておや。<sup>\*</sup>

右の如く觀するを以て吾人は本編に於て古代の支那農業と深き關係ありし一制度を、特にその社會的意義の方面より聊か考察せんと欲す、唯洗煉未だ充分ならず生硬の譏りは免がれざるべしと雖も、今姑らく寄稿の前約を果たし更に進みて研鑽を積むの料に供せんと欲す。

## 二

簡野氏字源によるに、「これまでのとほりを守りたもつ」を保守とせるも、辭源には保守の條を掲ぐるなし(尤モ同續編ニハ「保守黨」ノ條ヲ載スルヲ注意ス)保守そのものが支那人の性命(宋儒ノ用例踏襲)たるがために特に之が釋明を要せずとせるに非るやを訝からしむ、そは兎も角數千年の永きを貫き支那民衆の生活及風習は同じ鑄型に鑄込まれたり、經濟發展の自然變轉に驅られ、永樂通寶の方孔天下に通用せざるに至りても、此事實は渝ることなかりき、孔子の時以前に於てさへ生活及行動の社會的慣習及作法は形成せられたり、實際の事實として孔子が自から任ずとして公言せる所は、此點に付民衆に訓諭し、古人の足跡を踏襲せしむるに在りき、新社會秩序の創始者を以て任ずるなく寧ろ自から省みつつ未來後繼者行動の規則及案内として既に規律されたる現存典章を分類解釋す

\* Cf. Latourette, The Development of China. 5 ed. 37, p. 2.

るの一代理者たるに甘んじたり、論語中孔子自身の言行を述ぶる一編述而第七中、述而不作、信而好古と謂へるは是なり、この指導精神の下堯舜を祖述し文武を憲章するを以て學問の正道とし、歷代之を尊重推稱するに努めし結果、大體に支那の民衆をして前途の光明仰望の衆たらんよりも寧ろ懷舊尙古の臣民たるに至らしめ、輒近の諸思想及諸實務の採長補短に至難を訴へつつあるも是を其の理由とす、支那が往古文化的政治的團結を仕遂げたる曉に、その宗教化されたる信念、社會的風俗及日常生活の作法は法典化せられ、將來に於ける民衆への不易なる聖典となれり、從來の先例に負き之を改廢することは家神として崇むべき祖考の定めし既認慣例への信頼を缺くことを含意すとせられ、その儘默認さることなかりしは近年に至る迄の通態なり\*。

支那人の保守的たるは一般に支那の社會組織に多大の影響を及ぼしたる科舉又は現に所謂考試の制度によりても馴養せらるる所多かりしとすべきものの如し。即ち支那人は古よりそれ自體の施政に就き一般民衆を參與せしむるの途を開ける點に於て賢明なりき。而もそは現時の支那新人中に間々見受けらるる如く民主制に媚ふるの仕方によりて然るに非ず、寧ろ官職は教育を受けたる結果その任に適すとせらる人々への一權能として授けられたり。その教育たる輒近西洋の研究課程と對當なるを得ざりしと雖も、前數世紀間歐洲に行はれたる所に比すれば決して悔るべきに非ず、從ひて青雲の志ある者は前途に開かれたる一官歴を夢み、運よくば君側に侍するの地位に榮達せんことを望みたり。支那官吏てふ尊敬すべき大先輩に進むの準備階段たる既定の勉學課程により法外に夥しき青年は平調に引卸され、そは一樣に又保守的分子を生みたり、蓋し現存政治を保全し又自己の地位及昇進の望を絶たしむべき急變化を拒否するは全儒者團の利益なればなり而して此仕組たるその觀念發展及作用を一\*\*

\* Cf. Walter, H. Mallory, China: Land of Famine, 26, pp. 100, 101.

\*\* Cf. J. Dyer Ball, The Things Chinese, 4 ed. 1903, p. 268; J. Murdoch, Japan China India' in Yamagata, Japan's Position in the Far East. 21. pp. 114, 115.

括全體として觀察し支那社會の史的研究上深く顧慮するを可とすと考ふるは此仕組と貴族制との關聯なり、項を改めて聊か説かん。

世襲的貴族制存せざることは皇帝と臣民との間に於て時に最も有用又有力なることあるべき一鎖を支那民族間に喪はしめたり、有力なる貴族の一團存在し、その力克く一は君主の暴戾に抗し一は民衆の向上心を緩和し指導するに足るがために國民に授けらるる保安が如何に大なり得べきかを吾人は英國史によりて解す、支那にては何等かかる堅實なる勢力なくその結果社會機構に於て絶えざる無理又軋轢存し幾度か烈しき内亂を醸し、朝代の没落に終るも珍しとせざりき。尤も廣く歴史上の事實に徴するときは此言明に多少の斟酌を加ふるの必要も存するに似たり、即ち舊支那本部全般に互る文明の更新その萌芽の伸長を急ならしめし六朝（西曆二二〇―五八九年）特に南北朝（四二〇―五八九年）に際し、北に於ける幾戰亂及蠻民侵入は支那人の南下移住を生み、その動きは主として官吏及富者の移動たりしが如きも農民も亦その家を遷したり、かくて由來揚子江流域は支那文明の邊境に位し漢人種により占めらるること一部に過ぎざりしも、今や初めてそは漸次支那文化の中心主力となれり。純支那人の朝代は實に右三世紀の間その政府の中軸を此處におきたり、その地方人口の増加は第四世紀中及第五世紀の大部分急なりしものの如きも、次いでその後南方諸朝代經歷中著しかりし紊亂に際して遲緩となれるに似たり。<sup>\*</sup>又支那文化は新環境の下多少斬新なる形態をとれり、特に文學及美術に於て然り、<sup>\*\*</sup>その間一部の支那人は外民族並に庶民の血統との混亂汚染を避けんと試み、特に南にありては貴紳的大家門崛起し、要職の大部分を獨占し廣大なる所有地を兼併したり、彼等是一部の支配者之を禁遏せんと試みたるに拘はらず相互間に婚姻を通じたり、彼等

<sup>\*</sup> 統計學雜誌600號 pp. 6, 7.

<sup>\*\*</sup> Latourette, The Chinese: Their History & Culture. 2 ed. 34. I. pp. 163, 164; 市村、瀧川共著支那史 III, pp. 62, 75 f.

は屢々外民族又は部分的な外民族君主の支配下に忍ぶの外なかりき。之と同時に注目すべきは秦漢の世に發達したる官僚分屬政治に一變革加へられたることなり。即ち武官と文官との嚴別は此時代に起れりと推測せられたり、その理由として説かるる所によるに漢民族外の支配者は漢代より傳はれる官僚分屬政治を續けその諸地位に漢人を据えるを賢明としたり。されど武人征服者は右官僚政治の諸職分を民政事項に限り、軍隊に於ける諸地位は之を自民族に保留するの傾向ありき、然るに中央政權漸く微弱となれるに當り、封建制及幾多公國への國家分裂重ねて擡頭せるは避け難き所なりき。此時代に際し任官考試に於ける自由競争に打勝ち榮達せる人々よりも、漸く勢力を養ひ得たる貴族が要職を獨占するの傾向を呈したることあり。その間尙強大なる支配者起り過去に於ける典範の重壓を示すべき組織形態をとり、その權勢を張るの途に出でたること一再に止らざりき。<sup>\*</sup>されど支那は大體に貴族制の重荷を過載せらるることなくその諸弊害をも免がれ得たりとすべく、その教育は特に宋代以來近年に至る迄は嚴格にして陳腐となれる標準を守り、智能的榮譽への唯一の途は數千年の昔に遡る古典の知識に通達することによりて開かれたり。<sup>\*\*</sup>輾近の意味によれる應用科學はその課程中に含まれず眼目は悉く學問の哲學的方面に集注されたり。素より右の事情により前に説ける如く一朝代統一政治組織の永續性を危からしめたりとすべき半面も存す、現に前世紀中葉太平（長髮賊）の内亂に際し二百年間は支那一朝代の尋常持續期たり、こは世襲的貴族制と代議施設とのみにより授けられ得べき仲介勢力を缺くの實證を授くとは支那の一政治家により評論されし所なり、現民國にありては全國國民議會の形式漸く整へられんとするの機運熟せんとしつつあるも、一般國民が果して能く短年月の間にその精神を自得しその實績を擧げ得べきや未來を待ちて始めて知るべき所なり、蓋し由

\* Cf. Latourette, The Chinese, I. pp. 164, 166.

\*\* Cf. Mallory, op. cit. p. 104.

來民衆は政治上よりせば極微分子たり、その聲は何等承認されたる代表形態の上に表白せらるるなし、その正義要求を貫くの方として究極に頼む所は蜂起反逆の暴力に訴ふることに馴れしを以てなり。<sup>\*</sup>而してかかる事態を馴致せることと、それ自體古憲章の派生たる田制として起り、支那社會細胞組織の基本となり、その制度少くともその觀念は後世へ深甚の影響を及ぼしたる井田制との間には、輕からざる關係存すとすべきものの如し。

支那人は一面には強き個人主義非協力的本能を示すも、これは劇しき生活難生存競争により育成されたりとすべく、特に之が丁及半の迫窮は商人華僑の徒に窺ひ得べき所たり、支那固有の社會よりせば或は乞食の熱訴に應じて施與を惜しまず、或はその家族生活に夥しく連帶性を帶ぶるが如き、協力相互扶助の習風に富むは前記保守性と共に特に注目すべき所なり、略説によらんか、その社會生活は曾ては存せることもあるべき母權制を驅除せる父權制家族を土臺とす、婚姻せる息男は多くは家族と共に父の家に住み娘は婚姻により家を去り父死すれば最長男家長となる、婚姻は兩親により決せられ、一夫一婦制たるも蓄妾は古來承認せられたり。祖先崇拜は精神的に家族を團結せしめ、一地方に住める家族は氏族に結成せられ、そは祖先の祭壇、初等學校、所領地等を有し、その從屬者を保護し又是等につきて責を負ふ、同様に又あらゆる職業は、同業同職の關係上密接に結束せられ、農民、手工業者、商人、勞働者等各別に組合を結ぶ。是等の同業同職團體は相當組織の下公事生活及衛生生活を統制し、社會秩序を維持し、慣習無視の經濟競争及是に伴ふ諸弊害を排除し、豫じめ勞働條件生産給付及代價を規定するが如き事等に當る、かく大多數を占むる支那俗衆がその家族生活及組合所屬を尊重したるは近年に至る迄社會又は國家への奉仕及義務を輕視するの風を馴致せる所以、かくて俗衆間に於て社會又は國家の事項は個人の

\* Cf. Robert K. Douglas, *Society in China*, 1901, p. 148.; Murdock, *op. cit.* p. 125.



務と想はれず政府又はその諸機關のことに過ぎずと想はるるの風を生じたり。<sup>\*</sup>而して此成行は又古井田制と歟とも觀念的に關係ありとなし得べき所なり。

### 三

米國コロムビア大學歴史經濟及公法研究叢書の第二二五篇として公刊されし支那の一婦人 Mabel Ping-hua Lee の著支那經濟史は<sup>\*\*\*</sup>支那古典籍目錄及その普ねき抄節の米譯を含む點に於て、支那語及支那典籍の素養淺き者にとり重寶なる書籍なり、就中井田 T'ung T'ien につきては説けり。そは聖人の遺法として古代の協力制、行政制度又課税制たりき。その長所として擧ぐべきは經費の節約、風俗の統一、生産改良、貨物の便易交換、相互防衛、社會關係の親密、衆庶の協力にあり、支那が井田制より出發せるは人民間に於ける土地均分を以て始めたりとの謂なりと、<sup>\*\*\*</sup>その土地均分と謂ひ協力制と謂へるは吾人も亦特に眼目視せんとする所にして、そはやがて後世斯制を考究する者が一種の課税制として之を重視すると稍其の趣を異にする所なり。而して之を考究するの典據としては毛利貞齊の「孟子井田辨」、小宮山昌秀集説「井田集覽」(其ニ日本經濟叢書ニ輯録)を始めとし幾多故人の轍を履み「孟子」の敍説を主とし、旁々英人 Legge の孟子英譯及大體に同譯本文によれる採「註釋校正華英四書」中の孟子を参照することとせり。

朱熹は「孟子」滕文公章句上中喪禮及經界を論せし兩章に就きて評論したり。

見「孟子」之學識其大者、是以雖「方」禮法廢壞之後、制度節文不可復考、而能因「略」以致「詳」、推「舊」而爲「新」、不「屑」於既往之迹、而能合「於」先王之意、眞可謂「命世亞聖之才」矣

\* Cf. Mollory, op. cit. p. 106; Meyers kleines Lexikon, 31, I. S. 473.

\*\* The Economic History of China, With Special Reference to Agriculture, 1921.

\*\*\* Lee, op. cit. pp. 33, 34.

\*\*\*\* Cf. James Legge, The Life and Works of Mencius, With Essays and Notes, Lond. 1875.

と、孟子が性善、養氣、仁義禮智の四端即ち惻隱、羞惡、辭讓、是非の心を説けるは全く孔子の説に見ざる所なりとして誹議せる學者は古來和漢に尠からず、朱熹が孟子集註序說中に韓子、楊子及程子が孟子を尊重して説ける所を引用し、自己も亦之を推尊すること厚かりしを讃る者鮮少なかりしと雖も、その對立論争の迹を逐ふことと何等の興味を有せず、吾人は寧ろ孟子及朱子の新說又評論を採ることにより、時勢の變並に學說發展の迹を辿り得べしと考ふるを以て、右朱子の評に就きても多大の敬意を表せんと欲す。

支那由來の天子に視たるが如く帝國は我が物なり *L'empire c'est moi* と眞に謂ひ得たる王威は惟ふに世界中何處にも存せざらん、その臣民の生命財産を自由に處分せるのみならず、民の耕やすべき土地もその所有する世襲財産の一部たり、天に二日なく、地に二王なしとせる古格言に違ひ、天下唯一の天子とせらるゝがために支那全國土の所有者と想はれたり。支那の人口は稠密なりとするも、實際上地方により未墾地は常に依然として存せるを以て、その農業事情中には新土着者として無人の土地貸附を出て年々少額の反對給付をなすべき代りに土地使用の權利を譲らるべき殖民地農業に似たるものあり、土地は一氏族として之を譲受け、その族員共同して之を耕作するを例としたり。秦の世に至り土地私有の事實一旦承認せられてより後も此原則的觀念は依然として踏襲されたりとすべきものの如し\*。

「孟子」滕文公章句上中農事を勸むるは學教を布くより先務たるを論ぜし一章に於て井田に關し説く所によるに先づ左の一節を挿みたり。\*\*\*

夏后氏五十而貢、殷人七十而助、周人百畝而徹、其實皆什一也

\* Cf. Douglas, op. cit. p. 122; 田島博士著東洋經濟學史 p. 263 f.

\*\*\* 田島博士前掲書二五六頁以下、伊藤東涯著飯田傳一校訂制度通三七〇頁以下參照。

と民産の分配に關する統制と共に公課徵收の大本に就き説けるものなり、夏の成規によるに農民たる各家長は、田五十畝を受けその中五畝の產物を政府に納むこれ貢たり、殷の成規によれば六三〇畝を各七〇畝の均分地に分ち、中央の一區は政府のために留保せられ殘餘八區分地の八家族にて協同して之を耕やすものとす、周の成規によれば一家族に百畝（前記制度通三九五貢ニヨレバ今ノ一萬坪ニ足ラストセリ、比較研究ノ目的ヨリセバ周ノ畝及里ニ關スル考證ヲ詳カラシムルノ要アルモ今姑ラク之ニ觸レズ）協同家族に千畝を分ちその收穫物の約十分一を政府に納めしむることとせり、朱熹の註によるに徹通也、均也とし、都への距離の遠近別により貢助兩法を併用せることを認め、鄉遂用貢法、十夫有溝、都鄙用助法、八家同井、耕則通力而作、收則計畝而分、故謂之徹となし、その略ぼ什一稅法に該當する所以に關し聊か穿鑿に過ぐるの感あるも左の所説を附せり。

周制則公田百畝、中以三十畝爲廩舍、一夫所耕公田實計十畝、通私田（私有地ノ意ニアラズ）百畝爲三十一分、而取其一二蓋又輕於什一矣、竊料商制亦當似之、而以十四畝爲廩舍、一夫實耕公田七畝、是亦不過什一也、

と、何れにしても井田制に於て民産の均分と助法の名稱にも表はさるゝ相互扶助協力とは、その精神とせらるゝ所たるを知るべし。（孟子が後節中「無君子、莫治野人、無野人莫養君子」トセルヨリセバ、助ハ主トシテ官吏ト農民トノ關係ニカ、ルガ如キモ、ソノ精神ハ廣ク農民間ニモ及ボサルト解シテ可ナリ、ソノ後ニ尙後ニ擧グルガ如キ叙説ヲ附スルニ於テオヤ）而して右孟子の一節は極めて梗概的にして特に周代の制度につきては之が精説とするを得ずと雖も、後節に至り文公の使者畢戰に答へて推稱せる所は禮記（玉制）周禮（地官司徒）の敘説と一層よく合致す。

税法としての貢助二法の得失に就き、恩師田島先生は貢者校ニ數歲之中ニ以爲レ常之を租額と定め歲の豐凶に拘らず同額を徵するものなれば大弊害を伴ふべし助法の勝れるに如かずとせる孟子中の一節を以て、孟子か古賢人龍子の説を假りて主張せるものならんとせられ、又大宰春臺の如きはその時代に適せる税法論として、當代田租を取るの通法十分の四は井田法の什一に比すれば暴斂に似たれども民の苦痛とならずとし、上熟下熟の中を取て定額の田租を決し年々之を徵するの定免法は、歲の豐凶に應じ租額を増減する方法即ち助法に相當すべきものに勝れりとし、その主たる理由として年々の秋成を視極むべき毛見に伴ふ惡弊を擧げたる(『著「經濟錄」中』)等種々の議論あるも、本編の主眼は茲に在せざるを以て之を問はず、唯孟子中周代農業を詠せし詩經小雅の一篇を引き周の代にも殷代同様行はれしを示して

詩云、雨ニ我公田、遂及ニ我私、惟助爲レ有ニ公田、由レ此觀レ之、雖レ周亦助也、

とせるを附説す。孟子の當時既に助法廢れ典籍存せざりしも惟此詩あるがために周にも亦助法行はれしを察知すべしとせるならん。

井田に關し孟子が前引用文以上に詳しく畢戰に答へし所によるに、先づ經界を正し均田を布くは仁政の始なるを論じて曰く、(論語顏淵第十二中哀公ト有若ト問答ノ一章特ニ同註中楊子言參照)

仁政必自ニ經界ニ始、經界不レ正、井地不レ均、穀祿不レ平、是故暴君汚吏必慢ニ其經界、經界既正、分レ田制レ祿、可ニ坐而定ニ也、

と、暴戾の君佞奸の臣を忌むこと甚しく又豪強兼併の弊なからしめんかために經界均田を重視するの趣旨明かな

り、井地とは謂ふ迄もなく井字形に區劃するの謂なり (Legge the miresquare system of dividing the land ト意譯シタリ)\*  
唯土地に肥瘠の別あるを如何にせんとするかは別論とするも、領土全部が均田に分たれ得べきか、地面の自然に  
不規則なるは之がために大障礙たらざるか疑問は挿まる、惟ふに是がために調整の用にも充てられしは右一節を  
承けて説かるる卿以下への圭田その他の頒田なるべく、そは又絶えず經界の脩正を促がすの外なかりし所なら  
ん、同一見地より一層重視すべきは都に對する遠近別により立てたる大相違なり、こは前にも一言せるが孟子は  
之に就き左の説をなせり。

請野九一而助、國中什一使自賦<sup>フヘカシメン</sup>

と、是によるに周は夏殷の制に因りて斟酌し、國土の性質上その採用を許し又は可とする所に従ひ此相違を加へ  
たるに似たり、國中に對立せるものとしての野は郊外都鄙の遠地なり、助法によれるは官權の保護取締り及び難  
きを慮り農民の相助に待つ所多からんとせるによるものなるべし、國中は郊門内郷遂畿内の地なり、周制による  
に王城を去ること五十里 (素より支那里なるを注意す) より百里迄を郷 (六郷ニ分ツ) 百里以外を遂 (六遂ニ分ツ) と云へ  
り (字源參照) 井田を授けず唯農民のために溝洫を設け貢法により課税せり。而して農家一戸の構成及その經濟に  
就き孟子の敘する所によるに梁惠王章句上王道の大原則を説ける一章中謂へり。

五畝之宅、樹之以桑、五十者可以衣帛矣、雞豚狗彘之畜、無失其時、七十者可以食肉、百畝之田勿  
奪其時、數口之家 (同一章句中後段王道ニ關スル興味多キ長キ一章ニハ本節ヲソノ儘繰返セルモ、數口之家トアル代リニ八  
口之家トアリ、肥瘠上中ヲ得タル土地百畝ヲ以テ養ハルト見積レル人員ナルベシ) 可以無飢矣

\* Cf. Legge, op. cit. p. 203.

と、而して又盡心章句上の一章にも同様の趣旨を繰返し又始めて家畜數に言及して謂へり。

五母鶏、二母彘、無<sub>レ</sub>失<sub>二</sub>其時<sub>一</sub>、老者足<sub>二</sub>以無<sub>レ</sub>失<sub>二</sub>肉<sub>一</sub>矣

と、戰國時代に於ける秩序の紊亂思想の紛糾に刺戟を受けたることも預りて多かるべしと雖も、孟子が經濟の根據に立ちて道德的國家の樹立をその理想とし、頒白者不<sub>レ</sub>負<sub>二</sub>載於道路<sub>一</sub>矣、老者衣<sub>レ</sub>帛食<sub>レ</sub>肉、黎民不<sub>レ</sub>飢不<sub>レ</sub>寒、然而不<sub>レ</sub>王者未<sub>二</sub>之有<sub>一</sub>也とするの主張を貫けるは、私益拜金に偏し富者に媚ふるの弊に陥り易き一部經濟學者と全然その趣を異にせる所なり。現支那の農家經濟を觀し直面目なる根據により之を讚美する者もなきに非ず、その一班によるに支那農民は何等の實驗も遂げず一定量の穀物が擧げ得べき牛肉及豚肉の分量に關する精確の知識を有せざりしに拘はらず、數世紀の經驗により豚肉に替はるべき穀物は牛肉に變する際に比し一層多量の肉を産すべきことを知れり、従ひて支那に於て養豚は肉用牛飼育に比し遙かに普通なり、農民は牛及羊以上に豚を養ふために他の一大長所を有す、即ち豚は一の芥浚ひなり、牛及羊の斥ぞくべきものをも食す、實に牛及羊によりて牛乳、牛酪及羊毛を求むるがためならずんば、二者は何れの國にても豚と争ひ得べきに非ず、然るに支那人は牛乳及牛酪の代りに大に植物性油を使用し、又支那人中の大多數は綿布を羊毛服以上に賞用すべき程に遠き南部に住む、かくて羊の飼育は主として北支特に皮を衣料に使用すべき蒙古に存するは滿洲國に於けると異らず、支那の大領土中羊及牛は稀少なるに同國に於ける各家族は殆んど皆一又は二頭の豚を有す、又支那の家族多くは豚以外に少數の鶏を飼ふ、鶏は又一の芥浚ひたり、牛又は羊の斥ぞくべきものを食ひ、昆蟲その他の蟲類を採食し又落ち散りたる穀物ある所豚の餓死すべき所にてても生存し得べし、支那人は豚及鶏以外水の存する所何處にてても

家鴨を養ふ、家鴨は鶏の養はれ兼ねる淺水池及その水底に産する動植物により夥しく生存し得なければなり、支那人は豚、鶏及家鴨以上にその水路をたどり又その池中に魚を飼ふ、多數世紀の間鶏及家鴨を飼ふと殆んど同様の注意を加へてその池に魚を飼ひ貯へたり、土壤が主として黃土よりなりかくて水を保たざる北支にては池は普通ならざるも、中及南支と西支那の諸部分にては農民は通常各農圃の近くに池を有す、此池は百呎平方以下たり否時として十呎と二〇呎との地積にも及ばずと雖も之に魚を飼ふ、それは同面積の地を稻田として利用する際に産額を舉げずとするも、作物に水を供給し稻及蔬菜を立派に補ふべき一食物を産すべし、支那人は多くの場合に冬季中土地が遊べる間その農場に貯水し魚を飼ふ、數千載の經驗を尊重しつゝ、輒近自然科學及その應用に迂なりし保守的支那人間に此實績伴へるは寧ろ驚くべく、而もその由來を考ふるに古く孟子の鼓吹せる農家經濟論に負ふ所全くなしとするを得ん哉、殊に孟子が前記引用文の後を承け時弊を指彈して、狗彘食人之養、而不知檢、塗有餓莩、而不知發、人死則曰非我也、歲也（華英孟子脚註ニハ豚ヲ若豚彘ヲ牝豚トシ、狗ハ穀養ノ犬又食用犬トセリ、芥菽浚ヒ又ハ番犬トシテ考ヘラルル以外ニ是アルハ注意スベシ）と言ひ、その主張を強めたるを視て一層深く之を懷ふ孟子によるに百畝の普通頒田以外仁を野人に厚くし餘大二十五畝を受くとせり、程子の註によるに尋常農家の組成一夫上父母、下妻子、以五口八口爲率、受田百畝とあり、かくて又如有弟是餘夫也、年十六、別受田二十五畝、俟其壯而有室、然後更受百畝之用とせり、孟子が更に進みて井田の社會的道德的意義に就き説く所によるに、

死徙無出郷、郷田同井、出入相友、守望相助、疾病相扶持、則百姓親睦、

\* Cf. James W. Bashford, China an Interpretation. 16, pp. 29, 30.

\*\* Cf. A. E. Moule, The Chinese People, 14, p. 89. 同頁中ニ飼犬ノ用ト共ニ野犬 pariah dogs ノ害ヲ説クヤ興多シ。

とあり、井田制により一面保守を助長し個人自由自發の奮勵心を阻喪せしめたる點は存すべきも、協力相互扶助の美風を育成せるもの多きは明かなり、かくて孟子は周代井田の形體に關する左の一節を以て、その説を結びたり。

方里而井、井九百畝、其中爲公田一、八家皆私百畝、同養公田、公事畢、然後敢治私事、所以別野人也。右は孟子による井田制の大略なり、近完刊國民百科大辭典中井田の項によるに古代儒家に依りて唱へられし土地制度にして實際行はれしものに非ずとせり。かゝる意見は田口卯吉氏によりても夙に明治十六年の著支那開化小史中(三五頁以下)吐露せられ、その理由として、(1)地に山川沼澤の別人に強弱の差あり、畫一の制を以て民をして田野を耕やさしめんとするも決して得べからず、(2)封建の社會は兼併の弊多く貧富の差も甚しければ、天子はたとひ唯一の土地所有者たるもその耕地を平均し農夫をして各百畝を得せしむるは非常の變にして、久しく行ひ得べきものとも思はれずとせられたり、然れども同書頭註小池清一氏の評論中、禹之治水也、曰盡力溝洫而已、而井田即開溝洫之法也、故周之行井田、或由禹之遺制亦未可知矣とし、商鞅阡陌を開くがために井田を廢したるより察すれば、井田行はれざるに非るを反證せずやとせるは、寧ろ口穩當とすべからずや、何れにしても同制に宿さるゝ觀念が後世に大影響を及ぼし、特に漢王莽の井田法、唐の均田を生めるが如き深く注意すべきに非ずや。

#### 四

井田制及之に宿さるる觀念が家族主義氏族主義と相待ちて、相互扶助協力を育成せるは以上説き來れる所な



り、而もその一面には氏族の爲我、地方郷黨の我執に墮し、褊狹固陋の積習を養ひ各人個性の暢達を妨げ、従ひて輓近經濟社會に相應せる任意協力の發達は之がために却つて阻止されたるに似たり、現に Mallory は議せり。<sup>\*</sup>現代に處して協同一致の奮勵により資本の大合同並に實業上及政治上組織的機構によるの力如何に大なるかに關する認識狭きは、支那をして西洋諸施設の有効採用を果さしめ難き主要事由の一たり、大困難は企業經營上に横はれり、通例なるは會社の仕事と私益とを纏れしむることにあり、一旦一人の就任發表されんかその途端にその人の家族は無業の家族員を彼に脊負はしめ、親族をしてその事業職員中に据え事業組織を改革す、その大危険は事業總裁が事業上必要とし、又は支へ得べき以上に多數の職員を詰込むにあり、舊家長政府の下承認され今尙行はるゝ公金私用の慣習公行は公共責任感を萎縮せしむるに資すること多しと、惟ふに六朝に當りて興れりと曩に説けるに似たる過程はかくて後世の幾多財閥軍閥を生めるものなるべし。若し夫れ前記田口氏開化小史（二及三頁）に莊子中鄰里相望、鷄犬之音相聞、民至老死而不相往來との一節を引けるに對し、小池氏の頭註に余嘗讀英人米因氏村落論（H. Maine, Village Community）、云印度各地往々一氏族而成一村、其民仰族長聽命焉、其事無細大、一依習慣而行之、其所爲唯耕而食、織而衣而已、故雖近村隣鄉、相往來者少、蓋人生長于一地方、而不與外人接、則安其土樂其俗、無復他望也、顧應若是、莊叟之言、蓋不虛矣と附說せり、これは以上説き來れる所と密接なる關係を有すると共に、支那及印度の比較研究に一着歩を踏出せる點に興多しとすべき所、吾人は他日之を主題として取扱ふの機會を得んと欲す。

\* Cf. Mallory, op. cit., pp. 104, 105.